

第77回 防災カフェ（Web）を開催しました。



女性目線でチェック！第3弾

～「しが防災プラスワン」を活用して～

日時：2023年3月20日(月) 18時30分～20時30分

ゲスト：相川 康子 さん ((特活) NPO 政策研究所 専務理事)

ファシリテーター：勝身 真理子 さん

(ジェンダーファシリテーター 滋賀県立大学男女共同参画アドバイザー)

滋賀県では2022年6月に著作権フリーの啓発カード「しが防災プラスワン～女性の視点と多様性」Ver.1を作成・公表し、2023年2月に新たなカードを加えVer.2を公開しました。従来の防災研修などに、女性や多様性の視点を組み入れてもらうのが狙いです。プラスワンの作成意図を学びながら、活用方法を一緒に考えました。



ゲスト：相川 康子 さん

(1) はじめに－趣旨説明と流れ

「しが防災プラスワン～女性の視点と多様性～」は、従来の防災研修などに、女性や多様性の視点を組み入れてもらうことを狙いとした教材です。昨年6月にVer.1として「知っというカード」14枚を公表、今年2月にVer.2として21枚のカードを追加して合計35枚とし、5種類の「どっちにするカード」と合わせて公表しました。作成意図をお話しつつ、活用方法について皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

(2) 女性目線の重要性と「しが防災プラスワン」の作成意図

従来の災害対応は「現場の力仕事」のイメージが強く、担い手として屈強な男性や自衛隊や警察官などの専門職が想定されていました。熱心で善意にあふれた方が多いのですが、一方の性別に偏ったり、同じような立場や考えの人ばかりだと気づかないことがあります。これからの地域防災を考えるには、女性をはじめ多様な人々が参加・参画する必要があります。

過去の災害では、ライフラインが止まる中で家事等の負担が増え、旧来の性別役割分担を強いられ、ハラスメントに遭ったりで、女性たちが辛い思いをすることが多くありました。しかし、相談窓口が機能していなかったり、「非常時だから仕方ない」というあきらめ感があったり、表沙汰になることは少なかったのです。また保育所、学校、高齢者施設が閉鎖されたため、共働きしていた女性が家に残ってケアするために出勤できなくなり、それを理由にした解雇や降格も横行し

ていました。正しい知識と人権感覚を持ったリーダーがいないと、被害が広がってしまいます。家族愛や地域の絆が強調されすぎると、被害を申告できなくなり、居心地の悪い思いをしている方が出てしまうことを忘れてはいけません。

将来の復興計画を立てる段階でも、女性たちの参画は平時より少なくなってしまうがちです。また市区町村の約6割（1078自治体）では防災危機管理部局に女性が1人もいない中、男性だけで立案して施策を進めているという状態です。ほかの分野ではかなり男女共同参画が進んできましたが、防災分野だけは、まだまだ男の仕事というイメージが根強く残っています。

女性も研修を受ければ災害対応ができるはずですが、しかし、女性向けの防災講座の多くは、炊き出し訓練や水を節約する調理実習、子どものケアなど「妻役割」や「母親役割」を想定したプログラムで、未婚者や子どもがいない女性、働く女性や1人暮らしの女性たちのことは想定外です。

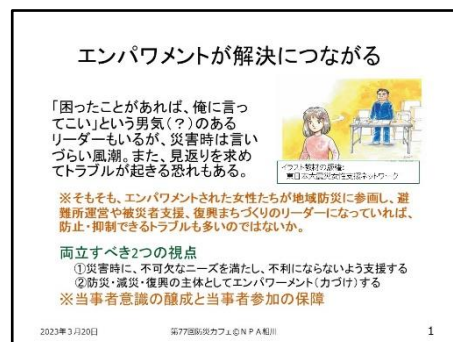
最近では内閣府や自治体、女性市民団体が「男女共同参画の視点で考える防災」や「女性に配慮した避難所運営」に関する

研修を実施したり、指針やマニュアルを作成したりしていますが、もともと女性問題に関心がある人しか受講せず、なかなか広がりません。女性たちは「何もできない弱者」ではなくて、「やればできるのだ」とカブける（エンパワメントする）機会をもっとたくさん作ることが重要です。エンパワメントされた女性たちが地域防災に参画し、避難所運営や被災者支援、復興まちづくりのリーダーになっていけば、防げるトラブルや解決できる課題も多いのではないのでしょうか。

女性が参画することで、これまでの頑強な男性の視点や価値観だけで考えられがちな災害対応に、多様な視点を取り入れることができます。本来は、障害のある方や外国人、性的マイノリティーの方など一人ひとりが当事者参加すべきなのですが、一足飛びにはいきません。まずは女性が入ること、少数者に当事者参加の道を拓いていくことが重要です。そのためには女性も炊き出しや救護などお仕着せの女性役割だけでなく、さまざまなことに挑戦していかなければなりません。

「しが防災プラスワン」は、防災対策で見落としがちな課題とその対応策についてわかりやすくテーマごとにまとめた啓発カード教材です。2019年度の「滋賀県女性の参画による防災力向上検討懇話会」における議論や提言がベースになっており、多くの方に使ってもらえるよう著作権フリーにしました。防災士、自主防災組織、消防団などの研修に1枚でも、1部分でも組み込んで（プラスワンして）ください。活用方法も無限大なので「このような使い方があるよ」という情報交換をどんどんして欲しいと思っています。

工夫やノウハウだけでなく、多様な意見を引き出す手法や、支援者が注意したいこと、人材育成と支え合いなど、「仕組みを変える」提案も盛り込んでいるのも大きな特色です。少数者への配慮、障害のある方、認知症の方への接し方などの要素も入れているので、人権感覚も養われていきます。



(3) カードを作ってみての感想、反響、可能性

「知っというカード」には在宅避難の工夫、暮らしの工夫、多様な人の防災、支援者が注意したいことなどの分野があります。「どっちにするカード」は、クロスロードを参考にゲーム形式で防災を考えるカードです。災害現場・防災活動における様々な場面を想定し、「YES」「NO」で対応を考えていきます。「知っというカード」と組み合わせることで、より広くより深く防災を学ぶことができます。これまでの防災に対する視点を少し変えると、新たな発見や見過ごしてきた重要なことも再確認することができます。

「しが防災プラスワン」は滋賀県のホームページから PDF でダウンロードできますし、県に連絡いただければ加工しやすい形式で入手できます。ホームページには月平均で約 50 回のアクセスがあり、8 割強の方から使いやすいと好評です。研修だけでなく、個人の家庭でも使っていただいているようです。

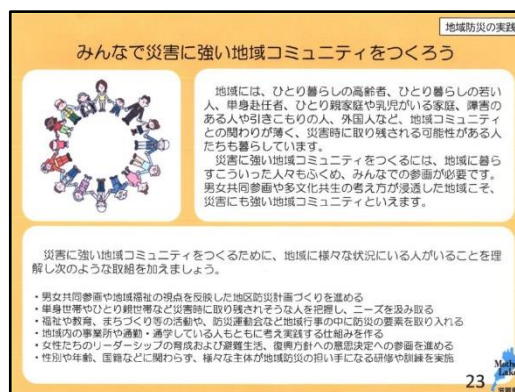
(4) 「知っというカード」の紹介

「知っというカード」35 種類の中から **A:みんなで災害に強いコミュニティをつくろう** と **B:支援者に求められる人権の視点の 2 つのテーマ** で、カードを紹介しながら、思いや考えを出し合っています。

A:みんなで災害に強いコミュニティをつくろう

「みんな」って誰のことなのか？ どうやって関係をつくるのか？ どのような雰囲気なら、どのような手法であれば小さな声を拾うことができるのでしょうか？

右上欄で概況や課題を取り上げ、解決策につながるものが下の欄に記載されています。課題のところみんなの参画が必要と書かれています。具体的にどのようにすればよいのでしょうか。他のカードを見てみましょう。「子どもと一緒に防災を考えよう」、「周囲に声を掛けよう」などがヒントになります。外国人の方がいらっしゃるなら「やさしい日本語を活用しよう」がヒントになります。「多様な意見を引き出す工夫をしよう」を見ると、集まりやすい場所に出かけて行って意見を聴いたり、オンライン参加の方法も検討するなどあります。アンケート等は、家族全員分の回答用紙を配るなどの工夫もあります。



A:みんなで災害に強いコミュニティをつくろうというテーマに関して●マンション住民、大学生など地域コミュニティと関連が薄い人達とつながる手法やアイデアは？ ●民主的に話し合う場づくりの工夫、●カードに対する感想や改善提案などを考えて見ましょう。

地域には、ファミリー層だけでなく、単身赴任の方や一人暮らしの大学生ら様々な人達があります。自分たちの地域にどのような方が住んでいるのか、どうつながれば良いのかを考えるとところから、災害に強い地域コミュニティづくりが始まります。一人ひとりの状況や困り事は違いますから、会

議の時間や手法、配席を見直したり、意見を言いやすいように話し合いのマナーを紙に書いて張り出しておいたりすると会議の雰囲気も変わってきます。

会場参加者から

- ・（現行の会議の問題点は）特定の方の発言しかなく、他の方の考えや思いがつかみにくいことです。女性からの発言も少なく、男性でも発言されない方が多いです。
- ⇒防災メニューを広げてみる、例えばカードにあるような家事シェアややさしい日本語、車いすの押し方講習などをテーマにすると、参加者層が変わってくるかもしれませんし、意外な方から意見が出たりもします。

B：支援者に求められる人権の視点

支援者に対して、被災者の方が本音を言えないこともあります。備蓄管理をしている方が男性ばかりだと、若い女性たちは「生理用品や下着が欲しい」などとは言い出せません。いろいろな方が支援に入ること、この人になら話せるという状況ができます。また、地域や家族の絆を強調しすぎると、女性たちが我慢を強いられ、ドメスティック・バイオレンス（DV）などが見過ごされることもあるので、支援者にはDV防止や人権に関する基礎知識が必要です。在宅避難している人達の安否確認や物資を届ける際に、男性だけで訪問すると、女性の被災者が警戒するので、男女ペアで訪問するようにしましょう。声のかけ方や話し方についても、あらかじめ研修を受けておくことが望ましいです。ゼッケンなど身元が分かるものを身に着けるとか、地域の役員と同行する、声を出せない人のために筆談用のメモやボードを携帯する、保健衛生の知識のある方が同行して相談窓口のカードを渡すなどの工夫もぜひ取り入れてください。

災害時には、DVなど人権侵害事案が増えます。身体的暴力だけでなく、義援金を男性が独り占めにするようなケースや、暴言など精神的暴力などもあります。多くの被害者が一人で我慢しがちなので、阪神・淡路大震災や東日本大震災では、女性グループが中心となって「女性限定の集まり」を開催したところ「はじめて本音が話せた」という人が多くいました。フェミニストカウンセリングの心得のある人が誘導役になって、何を話しても非難をされず、秘密が保たれる場を、官民とものにつくっていただきたいと思います。ティーンズや子育て中の母親等、属性ごとに集まるのも効果的です。男性や性的マイノリティーの方などにも、このような場は必要です。

災害によるストレスは、長期に渡って心身に悪影響を与えます。女性の場合は不眠傾向や便秘、生理不順などになりやすくなります。また、妊産婦・産後間もない女性に対する医療支援や配慮も欠いてしまいがちです。男女を問わず、保健衛生上の配慮が大切です。対象に合わせて、伝えたい内容のカードを選び、工夫を加えてください。

（5）「どっちにするカード」（Yes-No）の試技

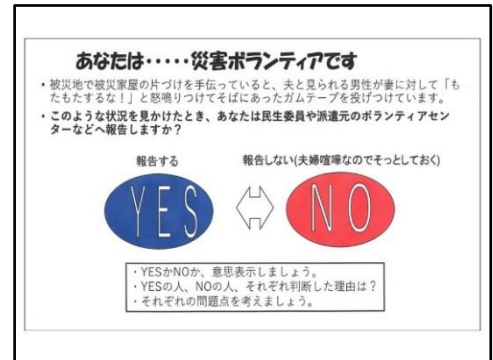
問：あなたは災害ボランティアです。被災地で被災家屋の片づけを手伝っていると、夫と見られる男性が妻に対して「もたもたするな！」と怒鳴りつけてそばにあったガムテープを投げつけてい

ます。このような状況を見かけたとき、あなたは民生委員や派遣元のボランティアセンターなどへ報告しますか？

YES か NO かを意思表示してください。そう判断した理由と問題点を考えてみてください。

会場参加者から

- ・ 民生委員などに伝えて、知っておいていただくだけでも手助けになるかと思えます。（イエス）
- ・ 強い叱責までなら我慢できますが、物を投げるのは良くないと思えます。（イエス）
- ・ 被災者の方はストレスが溜まっていると思われれます。時間の経過とともにより大きくなると思えます。さらにエスカレートする可能性があると思えます。（イエス）。



オンライン参加者から

- ・ 放置すると場の雰囲気乱してしまう。暴力を見過ごすようになってしまう。（イエス）

これらの問題はどちらが正解というわけではありません。イエスの理由としては、これはDVである、ノーの理由としては、夫婦間の関係に第三者が割り込むことになり、被災者の支援に来たのに、反感を買うことになるということが考えられます。報告するにしても、内情を知らないのに余計なお世話になってしまう、ボランティアセンターの人が困ることになる可能性がある、夫婦間の問題で片付けられてしまう等のことが考えられます。逆に報告しないとしても、さらに酷い暴力に発展する可能性がある、このような場面を見ている周囲のストレスが増加する等が考えられます。

災害になってから考えるのではなく、日ごろからどのようなことがDVなど人権侵害事案にあたるのかを知っておくことが大切です。イエス、ノーについて深く考えることで、問題点が鮮明になったり、解決方法が具体的に考えられると思えます。

時間があるので、「知っというカード」をもう少し見てみましょう。

1枚目は「出勤・出勤する人を支えよう」です。災害時には家族をおいて出勤・出勤しなければならない職種や役割の人が少なからずいます。家族のケアを担うことが多い女性は、意欲があっても「非常時に出勤・出勤できない」ことを理由に災害対応業務に就けないことがあります。そこで、出勤する人の家族を預かったり、見守ったりする仕組みを地域で作ってみてはどうでしょう。避難所や集会所などに臨時的託児所・託老所を開設したり、出勤する人たちの家族を支援者の自宅で預かったり、出勤する人の留守宅で支援者が家族に付き添うなどいろいろな方法が考えられます。カードを使うことでお互いにできる仕組みを考えることもできます。

次は「女性が安心できる避難所運営を考えよう」のカードです。防犯ブザーやホイッスルを配布することや、女性更衣室などの必要なスペースを確保するためにあらかじめ看板をつくっておくことなど、実践例が記されています。昼間に地域にいる人たちだけで訓練してみるのも大事です。「マンション内・外で助け合う」のカードもあります。災害時にはエレベーターが動かなく

り、上層階に住む人は孤立してしまいがちなので、安否確認の方法を考えておく必要があります。関東の共働き所帯が多いマンションの事例ですが、東日本大震災時に親より先に帰宅して怯えている子どものために、管理組合の有志が、共有スペースで臨時託児所（避難所）を行ったところ、帰宅難民になっていた保護者から感謝され、その後はマンション内での防災活動に積極的に参加してくださるようになったそうです。浸水被害が予想される地域では、マンションを、津波タワーのように近隣の住民の一時避難所にするという選択肢もあります。地域の自治会に参加されていないマンションの住民の方とも連携できる方法があると思います。

（6）まとめにかえて

「知っというカード」と「どっちにするカード」は組み合わせて使うことができます。1部分やイラストだけ使うこともできるので、解決策部分を出さずに、現状を伝える部分だけを見せて、自由に意見を出し合うなどの方法もできます。

一例を挙げると、やさしい日本語に関するカードを使い、子どもたちに「難しい言葉を小さな子や外国のお友達にも分かるように言い換えてみよう」とクイズ形式で問いかけることもできます。言い方を工夫するだけでなく、ボードに書いたり、絵に描いたりするともっと分かりやすくなる、などと考えることもできます。さらに発展させて、災害時だけではなく、日常のゴミ出しなどを外国人の方に分かりやすくするにはどうしたらいいか、などを考えることが多文化共生のまちづくりにもつながっていきます。

災害は、いつ起こるかわかりません。災害が起こったら、突然に「日常」が奪われるので、よりリアルに考えていくことが大切です。「知っというカード」と「どっちにするカード」には、具体的なことが多く取り入れています。答えは一つではありませんが、多様な意見を聴くための手法も入っているので、多くの人に使っていただける教材です。著作権フリーですから、これはいいと思ったカードを使ってください。そして、「こんなふうに使ったよ」「こんなカードがあればいいな」などご意見、ご提案などもお寄せください。さらにこの教材を進化させていきたいと考えています。

相川さん、勝身さん、参加者のみなさん ありがとうございました。



ファシリテーター：勝身 真理子 さん